

番号	項目	担当学科・委員会名	平成27年度に改善に取り組む課題	平成27年度に行う改善に向けた方策 <Plan(計画)>	平成27年度における改善に向けた方策に対する評価等		
					平成27年度の取組内容(結果) <Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等) <Check(評価)>	改善に向けた方策(案) <Act(改善)>
1	中期目標・年度計画	各学科	産業発展の原動力となるよう、学内研究基盤を強化するとともに、産学官金連携を一層促進し、これからの産業界に必要となるイノベーションの創出につなげる基盤的・先端的な研究を推進する。	科学研究費補助金などの競争的研究資金のさらなる獲得に努める。	<p><Do(実行)></p> <p><教養教育> 教員の研究活動の実績評価にあって、これを通り、科学研究費補助金の重みを大きくし、獲得への動機付けとした。</p> <p><機械> 各教員が積極的に申請を行い、平成26年度と比べて学内外の競争的研究資金への新規申請件数および採択件数は増加した。</p> <p><知能> 学科全体で研究費25件申請14件採択(継続、分担を含む)、その他の競争的研究資金20件受入、活発に申請した。</p> <p><情報> 科学研究費補助金においては、多くの採択がなされるよう、可能な限り申請を行った。また、重点領域研究において、新たに基盤的・先端的な実験環境を構築し、実験を開始した。</p> <p><生物> 例年生物工学科はほとんど全員が研究費に応募している状況のため、特別に啓蒙活動はしなかったが、ポスドク等の研究員を抱える講座(ERATOも含む)には、研究員による出願を推奨するよう依頼した。</p>	<p><教養教育> 前年度は継続1件、新規1件であったが、今年度は継続2件、新規3件となった。</p> <p><機械> 【優れた点】平成26年度に比べて新規申請件数および採択件数が増加した。 【改善を要する点】 特になし</p> <p><知能> 活発に競争的研究資金に申請を行っている。</p> <p><情報> 科学研究費補助金においては、採択数の増加が認められ、一方で、さらに申請数を増やす努力を要する必要がある。重点領域研究により、新型センサを用いた研究成果を創出した。</p> <p><生物> 平成27年度(昨年)の応募30件のうち新規18件(うち研究員3件、ERATO2件)、継続12件だったのに対し、平成28年度(今年)の応募30件のうち新規23件(うちERATO4件)、継続7件(うち研究員3件、ERATO1件)であり、新規申請で言えば18件から23件へと約1.3倍向上した。このように生物工学科はほぼ全員が継続もしくは申請中であり、申請状況は問題ない。ただし採択状況は言うところのERATO1件、研究員3件となっており、教員の取得率に若干の問題がある。一方で、比較的的研究費等を取寄せやすい若手教員からは、教育+雑務に費やす時間が多すぎ、予算取得に必要な研究や論文作成に費やす時間が全くとれないと苦情も出ている。</p>	<p><教養教育> 今後も引き続き、科学研究費補助金の獲得への動機付けとなるような研究活動の実績評価を行うっていく。 ※ 科研究費の全員の応募をお願いしたい。</p> <p><機械> 特になし ※ 科研究費の全員の応募をお願いしたい。</p> <p><知能> 引き続き競争的研究資金を獲得できるように積極的に申請する。 ※ 科研究費の全員の応募をお願いしたい。</p> <p><情報> 科学研究費補助金の採択数を増やすため、学内での情報共有、啓蒙活動を行う。重点領域研究において実施された研究を継続し、さらに発展させる。 ※ 科研究費の全員の応募をお願いしたい。</p> <p><生物> 教員の科研究費取得率の向上や科研究費以外の大型予算(NEDO、CREST等)の獲得に向けた葛藤、付けを学科学会等で行ってゆく。若手教員が研究に専念できるような環境(仕事の分担、効率化、一極集中の排除)作りも検討してゆく。 ※ ERATO以後の外部資金獲得に向け、奮起をお願いいたします。</p>
2	学生の受入、教育内容及び方法	教養教育	実験・演習科目において、平成28年度以降の学生数増加にどう対応すべきか検討する必要がある。	<p>時間割のシミュレーションを行う中で、授業内容、施設および教員配置について検討した。学科によって準備は異なるが、クラス分けやグループ分けを見直し、常勤・非常勤教員の増員を行う必要があることがわかった。なお、健康科学では、教員定員増の枠を利用して常勤教員1名の採用公募を行った。</p>	<p><環境> 科学研究費補助金などに関して、はできるだけ多くの採択がなされるように、学科全体で可能な限りの申請を行った。</p>	<p><環境> 学科が一丸となって取り組んでいく積極性が更に要求される。</p>	
3	学生の受入、学習の成果	教養教育	平成27年度からの高校新教育課程(理系科目)入学生に合わせた基礎科目の授業改善を行うため、本学の入学生の基礎学力の実態把握が必要。(外-8)	<p>基礎科目の入学生に力点を置いて、基礎科目の成績について、基礎科目教員のFDの場等を通じて情報共有を行い、意見交換を行った。入学時基礎学力テストの成績に関する、この教員上野傾向のある科目の成績が、引き続き上昇していることがわかった。また、入学後の基礎科目の学力に開いて、科目によっては学科間に学力差があることがわかった。</p>	<p>学生数の増加に概ね対応できる対策を立てた。ただし、対策には、常勤・非常勤教員の増員確保という不確定要素が含まれている。</p>	<p><環境> 学科内の先進的な研究の創生や発展に努め、1人でも多く申請を促す雰囲気成熟に努める。</p>	
4	学生の受入	教養教育	英語教育改善のためには、入学時の英語の学力の実態把握の必要があるが、これまで実施してこなかった。	<p>入学時の英語基礎学力テストを実施し、学力の分析を行う。 ※ 分析結果の回答が楽しみです。また対策があれば、教育論文ネタとして、実施してください。</p>	<p>高校新課程の最初の入学生に力点を置いて、入学時基礎学力に関する旧課程からの変化の状況を把握することができた。ただし、1部の科目で高校の新課程の内容に合わせた学力テストの修正などで、経年変化の分析は次年度以降に降された。</p>	<p>平成28年度はもとより、特に学生数増加が著しい平成29年度において、実際の学生実験・演習がどのような状況であったのか調査する。また、学生実験を行う分野の常勤教員の増員確保に努める。さらに周辺高等教育機関からの非常勤講師確保がより難しくなっている状況での対策を検討する。</p>	
5	教育内容及び方法	機械システム工学科	学科の基本理念や学習・教育目標がわかりにくい。	<p>1年生に対して、入学時および同年の12月に英語基礎学力テストを実施した。</p>	<p>【優れた点】基本理念と学習・教育目標との対応が明確になり、学外者にも分かりやすいものとなった。 【改善を要する点】 特になし</p>	<p>平成28年度からのコミュニケーションに重点をおいた高校新教育課程(英語)の学生の入学および入学定員増による学生数の増加(特に平成29年度)の影響も含め、継続的に調査を実施していく。</p>	

番号	項目	担当学科・委員会名	平成27年度に改善に取り組む課題	平成27年度に行う改善に向けた方策<Plan(計画)>	平成27年度の取組内容(結果)<Do(実行)>	評価結果(優れた点、さらに改善を要する点等)<Check(評価)>	改善に向けた方策(案)<Act(改善)>
6	教育内容及び方法	機械システム工学科	卒業生の研究室への配属時期が遅い。	研究配属時期の早期化を検討する。 ※共通認識が図れば、早めにお願しいたい。	学科全体で配属時期の早期化について議論し、配属時期に関する問題を教員間で共有するとともに、今後取り組むべき事項(規定の整備等)を明らかにした。	【優れた点】教員間で問題を共有でき、今後取り組むべき課題が明らかになった。 【改善を要する点】規定の見直しなど、配属時期の早期化の実現のための環境整備が進んでいない。	規定の見直しなど、配属時期の早期化を実現するための環境整備を進める。
7	施設・設備及び学生支援	機械システム工学科	TAを希望する大学院生とTAを必要とする授業とのマッチングがうまく行かない場合があることや学科共通費からTA費用を支出する際のルールが未整備であること等、TA制度の運用上の課題がある。(外-13,14)	TA制度の運用方法を検討する。	TA制度の運用方法に関する問題点とその対策を検討した。その結果、次年度以降は、マッチングをスムーズに行うために採用計画を早めに立てることとした。	【優れた点】新しい運用方法を整備することができた。 【改善を要する点】特になし	特になし
8	自己点検評価	機械システム工学科	自己点検評価のためのデータベースが未整備(外-45,67,73,74,91)	共有するデータの収集を行い、その更新方法を定める。	H25年度自己点検評価の際に作成したデータを一元的に管理するルールを定め、次の自己点検評価時に活かすことができるようにした。	【優れた点】自己点検評価時に作成したデータを一元的に管理するルールを定め、次の自己点検評価時に活かすことができるようになった。 【改善を要する点】データのフォーマットについては統一されていない。	改革・評価委員会のガイドラインに従って、保存するデータのフォーマットを統一する。
9	学生の受入	知能デザイン工学科	主に高校生を対象にした研究室紹介等に対して、アドミッション・ポリシーを反映した見学等を実施できているが、戦略的な対応案として適したものが評価できていない。	入試・学生募集委員を中心として、学生募集のための研究室紹介等の方策を議論し、近年の実施例を評価する。その上で今後の対応案を策定する。	近年の学生はロボット関連技術に志し、本学科に入学してくるものが多い。そこで、オープンキャンパスの模擬講義や研究室見学では、ロボット関係のテーマを増やした。オープンキャンパス参加者アンケートはとも好評であった。また、COCの高次連携事業では、ロボットやその周辺技術に関するテーマを提示した上で、高校生の希望で配属テーマを決めた。	同様に本学科のアドミッション・ポリシーを反映した学生募集活動を行う。	
10	学生の受入	知能デザイン工学科	受験生のニーズや社会情勢、他大学の状況等を加味し、入試科目や配点等を見直しを検討する必要がある。	学科会議で随時検討し、検討結果を本学の入学試験・学生募集委員会等に提案する。	学科会議で随時検討した。オープンキャンパス等の入学前へのアンケートや入学アンケートを踏まえ、本学科の入試のやり方は受験生のニーズを概ね満たしていると考えられる。一方で、編入試験については、本学科のアドミッション・ポリシーに即した学生が入学できるよう、入試科目目なびに配点の見直しを議論した。	受験生のニーズや社会情勢に即した議論が行えており、改善の方向にまとまっていることは評価できる。	見直し案については、議論を継続する。受験生のニーズや社会情勢には、引き続き注視する。
11	教育内容及び方法、教育の内部質保証システム	知能デザイン工学科	(1)専門用語調査をもとにした学生の知識力を検証し情報共有をしたが、まとまった機会に系統的に行えていない。 (2)年次を超えて学生同士が教えあう教育プログラムで、チューター側学生の調査はしたがその解析は途中であり、また評価できていない。	(1)毎年の理解度調査の結果や各教員が実施するミニテストや定期試験の結果を踏まえ、学科FD会議において情報を共有する。 (2)引き続きアンケート等の解析を行い評価する。	(1)学科FD(6/19)にて調査結果を報告し、情報を共有化した。選抜科目の履修状況によって理解度に差が生ずることが分かった。 (2)受講生の他、チューターや担当教員にもアンケートを行い、解析を行った。受講生およびチューターの相互に学力向上の効果があつた。教員がレポートの書式や記載すべき結果の不備を指摘する割合が減り、内容を指導できるようになった。	(1)専門科目における学生の理解度を把握することができた。 (2)レポートの評価が全体的に向上した。	(1)学生が各自で重要用語の理解度を確認できるように用語集を紙ベースで配布し持たせることにした。またエスプリ上に用語集のファイル置き、いつでもチェックできるようにする。 (2)レポートの点数が増加し、全体的に成績が向上した。今後この取り組みを継続する。 ※教育論文ネタになりませんか？
12	教育内容及び方法	知能デザイン工学科	企業経営概論と知能デザイン工学特選履修者数は、年次ごとにばらつきが大きく、特に企業経営概論は履修者が20名程度と多いとは言えない。	企業経営概論の履修者を増やすため、コンタクトグループ(前期成績配布時や専門ゼミの初回)で履修を勧める。	コンタクトグループで履修を勧めた。今年度は特別講義が47名、特別講義2が41名、企業経営概論が20名受講し、全体的にこれらにより受講数が増えた。	コンタクトグループで個別に講義の魅力を説明し、企業や大学の意義を理解させることができた。	次年度以降もコンタクトグループを通して学生に履修を勧める。
13	施設・設備及び学生支援	知能デザイン工学科	(1)レポート課題を課しているも提出しない理由を調査したが、その対策は立てられていない。 (2)基礎学力不足の学生に対して組織的な対応をするため、教養教育の担当教員との情報共有は活発に行えた。ただし、システムティックな情報共有は行っておらず、さらに仕組みを検討する必要がある。	(1)判明した理由をもとに、教務委員を中心として組織的な対応案を立てる。 (2)会合や会議に限定することなく、教養教育教員と情報交換し学科内に共有できる仕組みを、学科評価改善WGを中心として検討する。	(1)レポートの提出状況をその都度、エスプリに記載し、担当教員間で情報を共有化した。またレポートを提出できなかった学生からヒアリングを行った。学科会議で未提出者の状況を報告し、ゼミ担当教員から提出を呼び掛けてもらった。未提出の理由は特になく、怠惰が積み重なったためだと推察した。 (2)WGで検討し、3月の学科FD会議で議論した。学生カルテを積極的に活用し、基礎学力不足者の状況を把握することにした。	(1)レポートの未提出者に対し早期に対応できるようにした。 (2)特になし。	(1)レポートの提出状況を絶えず把握し、早期に担当教員から指導できる体制は継続したい。未提出レポートを複数になる前に提出を呼び掛ける仕組みを作るようにする。 (2)学生カルテや学科会議を活用し、低学年次生で基礎学力が不足している学生の情報を共有しやすくなる具体的な仕組みを作るようにする。
14	教育の内部質保証システム	知能デザイン工学科	アンケート結果は全学的なものであり、本学科に特徴的な結果が出ているかわからない。	学科独自のアンケートを行うか、全学のアンケート結果から本学科の分を抜粋して提供してもらう。これは、学科FDなどを通して検討する。	過去3年間の全学のアンケート結果から、学科ごとの専門科目総計を抜粋して比較し、3月の学科FDで議論した。その結果、本学科の理解度を示す結果は他学科と大差がないことが分かった。卒業生アンケートを活用することによって、本学科の教育における特色を抽出でき、それが学科の目標にかかっているかを評価できると考えられた。	本学科の教育における特色を抽出できる手法を検討できた。	全学授業アンケートでは、理解できなかつた箇所や理由を特定するため、アンケートを行う際は自由記述欄への記述を促すようにする。卒業生アンケートの配布と回収時期、内容を見直し、本学科の教育の特色を見られるようにする。
15	教育の内部質保証システム	知能デザイン工学科	今年度末で学科設立から10年が経つが、そのような中・長期的視野での学科のレビューや目標設定が不十分である。	学生受入・教育・研究・学生輩出に大きく分け、それらの10年間に渡るレビューや目標設定を学科FDで議論する。 ※これは非常に良い取り組みです。	学科設立の目的、1回目と2回目の自己点検評価報告書の内容をもとに、3月の学科FDで議論した。本学科のこれまでの優れた点を評価でき、同時にさらなる改善点やより正確な評価のための手法について議論できた。	学科の強みを確認するとともに、今後の改善指針を議論できた。	レビューの結果を次年度のPDCAに反映させる。

番号	項目	担当学科・委員会名	平成27年度に改善に取り組む課題	平成27年度に行う改善に向けた方策<Plan(計画)>	平成27年度の取組内容(結果)<Do(実行)>	評価結果(優れた点)さらには改善を要する点等<Check(評価)>	改善に向けた方策(案)<Act(改善)>
16	中期目標・年度計画	知能デザイン工学	少人数教育を核とした、対話型の教養ゼミやトピックゼミ、実験や実習を重視した授業、全学年にわたる環境教育とキャリア教育など、学生一人ひとりにゆきとどいた特色ある教育を推進する。	県内のものづくり技術や県内企業等の理解促進を図るため、県内企業の経営者や技術者等を外部講師として、富山のものづくり産業講座を開講する。 ※ 継続をお願いしたい。	アルミ、工作機械、金型、電子部品、情報産業の5分野で県内企業の講師が富山県における各分野の魅力を特徴について講義を行った。3年次生41名が履修登録を行った。	講義を継続するとともに、座学による講義の他、実際に工場に行き、製造現場で説明を受けることができる講義を検討する。	
17	教育内容及び方法	情報システム工学	卒業研究の配属方法について、学生が満足しているとは言えない。(外-6)	今年度から3年後期の専門ゼミにおいて事実上の研究室配属を行う。学科内検討グループで昨年度および今年度の研究室配属結果を分析し、課題・改良点等を明らかにする。	3年後期の専門ゼミにおいて事実上の研究室配属を行った。平成26、27年度4年生の配属結果、及び現在の配属方式結果について、仮想的に成績順に配属した場合と比較し、その結果について学科内検討グループで分析・検討した。	卒業配属時に3年生後期配属から変更するための例外的基準に留意し、事例をもとに学生の学力向上維持の観点から議論を行い、決定する。	
18	施設・設備及び学生支援	情報システム工学	学生が自主的に勉学に取り組む姿勢が欠けている。(外-17)	昨年度に引き続き、地域共同科目や実験など、学生が自主的に取り組むべき課題について、時間外学習を行うように各教員が指導する。また、3年後期の専門ゼミ配属を事実上の研究室配属として、3年後期から研究室単位の個別指導を行う。 ※ ぜひお願いします。	指導の結果は来年度卒業までの活動や進路決定時に効果がある。また、次年度から学科内の教育改善委員会を中心に学科FDなどで評価を行う。	評価の結果、効果が現れている。また、3年後期のゼミの進め方について学科で改善へ向けた議論を行う。	
19	教育情報公表	情報システム工学	情報発信が不十分である。	学科WEBページの運用方法について検討し、更新頻度を上げる。 ※ 情報が全学科をリードしてください。	・学科内から掲載可能なコンテンツを効果的に収集する施策を検討した。 ・更新頻度は特に上がらなかったが、英文コンテンツ等を追加した。	・学科内で定期的にコンテンツ提供を呼びかける等、更新頻度向上に向けた施策を実行する。 ※ なんとかコンテンツを効果的に収集する仕組みを見つけてください。	
20	学生の受入	生物工学	大学院進学率が減少している。	4月の各学年ガイダンス時に、大学院紹介を行う。オープンラボを複数回行う。オープンキャンパス時に大学院ガイダンスを実施する。大学院案内を学術誌において掲載する。 ※ 昔のように、他大学から受け入れるシステマの復活も?	4月の各学年ガイダンス時に大学院紹介を行い、同日に学生全員に対してオープンラボを実施し、研究内容の紹介とともに、院進学の利点を強調アピールした。また、球技大会開催日(5/22)にもオープンラボを行った。4月のオープンラボでの参加者数は延べ75名(1年生4名、2年生1名、3年生70名)であった。これに対し、5月の開催時は70名(1年生0名、2年生34名、3年生36名)であった。その結果、夏入試受験者は8名(筆記試験免除4名、筆記試験受験4名)、冬入試受験者は(1回目+2回目)は3名であり、昨年度実績の6人から5人増加した。オープンキャンパス時に大学院ガイダンスを実施しようとしたが、希望者が集まらなかったため中止した。大学院案内(夏入試、冬入試)を学生の購読者数が多い学術誌に掲載するとともに、本学を志望する可能性のある学生を有する私立大学等の知り合いにダイレクトメールや電話で試験案内をし、他大学からの受験生を積極的に勧誘した。	一見してオープンラボの参加人数は多いように見えるが、限られた学生が全ての研究室を回っている実情もあつたこと、ほとんどの3年生は院進学についての興味より配属希望ラボの情報収集のために利用しているようであったため、全学生に対しての意識付け改善の余地がある。入試の受験者数は昨年度と比べてほぼ倍増したが、オープンラボ開催が顕著な受験生向上につながつたとは言いがたい状況である。依然として入学者定数を満たしていないため、オープンラボの運営方法や入試制度の根本的改善などについても今一度見直しが必要がある。また、積極的な外部への入試情報発信にもかかわらず、外部からの受験生はゼロであったため、より効果的な方法を模索する必要がある。	
21	教育内容及び方法	生物工学	教員及び若手教員を中心に、生物工学科が輩出しようとする学生像をもとにして、学科の理念等を見直し、改訂が必要なもの洗い出す。社会で求められる人間力を醸成するための講義、例えば学生参加型講義の開設・増設、講義内容の工夫を検討する。 ※ 早急をお願いします。	新設予定の医薬品工学科との協力カリキュラム比較等により、生物工学科カリキュラムの現状把握と、改訂が必要なものがあれば洗い出す作業を行っている。アクティブラーニング型授業を複数導入するなど、主体的に学習する力を養成することを旨とした授業を行った。	カリキュラム比較は取り組み中であるが、H26年度から継続的に握ってきたカリキュラムの現状把握と問題点の洗い出しにより、学生の学習進捗に対し教育内容が過剰である、などの問題点が見えてきた。アクティブラーニング型授業の実行により、その効果と問題点も明らかになってきた。	生物工学科の強み、特長を議論して再認識し、生物工学科の教育理念、学習・教育目標、カリキュラム、大学院講義との連携などを継続的に見直し、それとともに、実効性のある教育を実現するため、授業研究を継続する。加えて、医薬品工学科での教育内容との違いを明確化し、両学科間での比較を策定する。	
22	施設・設備及び学生支援	生物工学	学生の意識向上への取り組みなどの見直しが必要(外-18,33)	これまで授業改善を積極的に進めてきた教員に複数教員を加え、授業改善チームを組織した。全教員が参加するディスカッションの開催や、いわゆるアクティブラーニングの実践と情報共有等、教育改善の試みを継続的に行い、その成果、ノウハウを学科にフィードバックする。これまでのカリキュラム改善に加え、「身につく教育」の実現を目指し検討を行う。 ※ 早急をお願いします。	様々な形態のアクティブラーニング型授業が実践され、その効果、問題点に関する知見を得ることができた。ワークシッティング型講義を実行することで、これについての方策、問題を明らかにする。	一部の授業で行われたアクティブラーニング型授業を引き続き行い、その効果を見ていく。授業改善チームを中心とした教育改善案の検討や、学科FDでのディスカッションを継続的に進める。	
23	教育研究組織	環境工学	学科の講座制における教員の役割分担と責任の所在を明確にする必要がある。(外-2)	学科の講座制は取っていないが、学科全体として教員の役割を再確認する。	担当講義を含めて、各教員の役割を再確認できたことは、評価に値する。 ※ 私も評価します。	学科拡充に向けて、更に体制を整えていく。	
24	教育研究組織	環境工学	国際化へ向けての教員のポテンシャルの向上を図る必要がある。(外-12)	学科において国際化に対応した活動を企画し、教員の参加を促す。 ※ ぜひお願いします。	新教育プログラム開発・試行・実施支援「大学院での英語授業を旨とした英語学習プログラム(開発 試行 実施)」を実施した。	頻繁に定期的に、学生や教員が英語に触れる機会を持ち能力の向上につなげていく。	
25	学生の受入	環境工学	入試における併願制の問題の改善を図る必要がある。(外-5)	学科拡充において補充後の学科の教育目標、学科の特徴を確認し、学科にふさわしい入試制度(併願制等)に改善を図る。 ※ 偏差値を下げず、間口を広げられるという理論武装をつくりましょう。	入試委員会からの質問に関して、丁寧に回答し、着実に進んでいることは評価すべきである。	入試科目の拡大が実現するよう、努力をしていく。	
26	教育の内部品質保証システム	環境工学	授業アンケートの活用による授業改善への必要がある。(外-8)	学科FD研修会を開催し、授業アンケートについて議論した。	FD研修会を開催し、各教員の様々な取り組みが紹介され、刺激を得ることができたと評価できる。	各教員の優れた取り組みは、積極的に取り入れて行くべきである。	
27	教育情報公表	環境工学	学科ウェブサイト充実を図る必要がある。(外-10)	ウェブサイトの担当教員を決め、大学院のHPなどに積極的にウェブサイトの充実化を図った。	昨年度より、ウェブサイトが充実したことは評価できる。	更に積極的にウェブサイトの実現を図っていくべきである。	

